これからの職場巡視

職場巡視の目的が広い意味での労働災害の防止にあり、事業場の安全衛生管理を進める上でも重要な活動の一つとなっていますが、最近では職場巡視が日常化するに従って、その中身がマンネリ化の傾向にあることが指摘されております。

そこで、これからの職場巡視の重要と思われる「職場巡思」の考え方について、安全衛生のバトン研究会代表の菊池　昭氏が興味ある内容を述べられていますので紹介します。

この「職場巡思」の発想は単に職場を見るだけではなく、KYやリスクアセスメントの手法を活用して「考える巡視」を行うことを主眼としています。

▲TOPページへ

職場巡視のポイント

○計　画（Plan）

①チームプレイによる巡視
職場巡視は一人でも行うことができますが、巡視の精度を高めるためにはチームで行うのが望ましい。（安全衛生スタッフに加え設備担当者、現場の管理監督者、産業看護職など）

②職場巡視計画の作成
職場巡視の目的、重点事項等を明確にした職場巡視計画を作成する。

③チェックリストの準備
チェックポイントを明確にするとともに、職場の実情に適応した項目を盛り込んだチェックリストを作成しておく。

○実　施（Do）

①見えないものを見る
職場に入る前に主な工程・設備・原材料、該当する法規制内容、過去の災害発生状況や調査・対策の結果、職場巡視結果などの情報を入手しておき、その職場の正しいイメージをつかんでおく。

②物の姿から行動を考える
職場巡視中に不安全行動を見ることは稀なことですが、不安全行動は災害発生の重要な原因であり、現状の状態から不安全行動につながらないか予見する。

③定常作業から非定常作業を考える
定常作業を観察し、それに付帯する準備・後始末作業、点検・異常処理作業などの非定常作業を考え、隠れたリスクを発見する。

④不安全行動を考える
安全作業標準が守られていても内容に無理があれば、動作の省略や保護具の不着用の原因となる。したがって不安全行動や動作ミス、機械間の無理な通り抜けなどの不安全行動の原因を予測することが重要です。

⑤現象から背景を考える
例えば職場の隅に、ねじれた不良の玉掛け用ワイヤロープが掛けてあったとします。これをその場で注意しただけでは真の問題解決にはなりません。問題は「なぜ不良ワイヤがそこにあるか」です。
この背景には「ワイヤの点検基準がない」「ワイヤの廃棄基準がない」「ワイヤの点検責任者が決められていない」「吊具に関する教育・指導がされていない」などが考えられます。
すなわち、問題を正確にとらえ、正しい対応をすることが重要です。

以上のことを参考に、新たな視点で職場巡視を行い職場の「危険ゼロ」を目指しましょう。

「災害ゼロは安全委員会の願いです」